

鬼の御宿の嫁入り狐3

不老の花弁と時送りの玉手箱

梅野小吹 Kobuki Umeno



アルファポリス文庫

第一話 若君の愁い事

一際強い風が唸り、肌にはぽつりと水滴が跳ねた。雲間には白い月と陽光が覗いていて、雨が、どうやら雨が降ってきたようだ。山道を下っていた老翁の鬼は、天を仰いで目を細める。

「お天道様が出るとるっちゅうのに、空が泣きべそ垂れてきやがったのう」
翁はのたまい、黄褐色の瞳の中に霞んだ青空を映す。白い髪と長い髭。そして雄々

しい角が印象的な彼の頬には、羅刹の血族であることを示す紋様も刻まれていた。
ぽつり。再び雨に打たれ、鬼の翁は口角を上げる。

「狐の嫁入りってヤツじゃ」

眩き、翁は編笠を被った。足元はぬかるみ、湿った苔と土の匂いが辺りを包む。

牙のある歯列を覗かせた彼が山頂付近から眼下に捉えているのは、険しく連なる山岳地帯を、三日月の形にくり抜いたかのような隠れ里。鬼の棲まう辺境の地。「もうそろそろかのう」とこぼした後、翁は笠の下で目尻を緩めた。

「近く、相見えることになりそうじゃな。ワシの可愛い孫ちゃんたちよ」

強まり出した雨の中、翁は微笑み、身をひるがえす。

此度の狐の嫁入りは、果たして神聖な吉兆か？
それとも、迫る災いの前触れか――。



空がさめざめと泣いている。水嵩が増す川の周辺で、ツバメは低く空を飛ぶ。

急な雨で小鳥や蜻蛉が右往左往する中、川端に佇む旅籠屋にも、まるで雨から逃れるように若い鬼の客が訪れた。

ぴくり――物音を聞きつけた狐耳。ぱたぱたと小気味よい足音を立て、白い尻尾を揺らす娘は、客の出迎えにやってくる。

「いらっしやいませ、道中お疲れ様です！ お越しをお待ちしておりました！」

床に膝をつき、頬をほころばせたのは、この御宿で仲居として修業している娘――縁であつた。しやなりと背筋を伸ばし、微笑みを浮かべて客と向き合う。

濡れ髪さながらで旅籠屋を訪れた若い鬼の男は、目を丸め、ほどなくして鬱陶しげに表情を歪めた。

「ぬ……。鬼の里の旅籠屋に、狐の仲居がいるのか？ 縁起の悪い……」

「いいえ、私は狐ではありませんよ」

「は？」

「それどころか、あやかしでもございません。私は、この御宿に拾われた、ただの幸福な娘にございます」

嫌悪を孕んだ若鬼の視線も意に介さず、縁は自身のことを堂々と説く。まったく動じていない彼女の態度に、鬼は眉をひそめるばかりだ。笑顔を崩さない縁は、ずぶ濡れの彼に手拭いを差し出し、再び仲居としての口上を述べる。

「遠路はるばる、ようこそおいでくださいました。本日は、お泊まりでしょうか？」
「……いいや。湯を借りに来たただけだ。雨に降られたものでな」

「あ、お風呂でございますね！ でしたら、ご案内いたします！」

明るく立ち上がった縁は、「こちらですー！」と先導し、狐の尻尾を揺らめかせた。彼女の歩いた道筋には、はらりはらり、花卉が舞う。

「なっ……？」

突として降り落ちてきた花吹雪に、旅の若鬼は目を見張った。桜、藤、金木犀――様々な花卉が舞う廊下で、鬼は周囲を見渡すが、花の木などあるはずもない。

「な、何だ？ 花など、一体どこから？」

「えへへ、幻術の師匠から教わった、おもてなしの術でございます」

「幻術だと……」

「まあまあ、お気になさらず！ どうぞ、こちらへ！」

戸惑う客に縁は微笑み、花の舞う廊下を進み始めた。廊下に降り積もった花弁は、ふたりがそばを通過すると音もなく霧散する。やはり幻術で作られた花弁らしい。

「鬼の御宿で妖狐の術を見ることになるのはな」

鬼の男は呟く。縁が「綺麗でしょう」と頷いた頃、風呂場へ続く暖簾の前で、湯上りらしき別の鬼の客と鉢合わせた。

屈強で仏頂面な先客は、恰幅がよく、背丈も六尺を優に超える大男だ。野蠻そうな鬼の目に、若鬼は息を呑んだ。だが、目の前の大男が縁と視線を交えた途端、その強面からは想像もつかないほど朗らかに破顔した。

「おう、お縁ちゃん！ 今日もいい湯だったぞ！」

「わあっ、本当ですか？ そう言っていたら、女将様も喜ばれると思います！」

「はっはっはっ。一日の終わりにヤァ、やつぱり燕屋の湯につからねばなァ」

一見厳格そうな大男だったが、意外にも気さくな様子で縁に声をかけている。若い鬼は、拍子抜けしたように目をしばたいた。

通常、鬼族というのは、異種族を嫌うはずなのだ。しかし、目の前の大男は、縁

が異種族であることなど意にも介さず接しているように見える。さらに、暖簾の奥にいた別の鬼たちも、ぞろぞろと外へ出てきた。

「おお、狐っ子。女将に饅頭を渡しておいたぞ。後で食べんさい」

「え！ お饅頭！ やったあ！ ありがとうございます！」

「しっかし、お縁よ。お前さん、少しほったが丸くなったんじゃアねえのかい？ 客からの土産物をたらふくつまんでんだろ」

「うっ……！ じ、実は、最近、お客様からいただいた黒砂糖を、こっそり隠れて食べておりまして……」

「はは、相変わらず食い意地が張ってらァ！ 女将にバレたら大目玉喰らうぜ」

「ひっ！ 女将様には、どうか内緒にしておいてくださいませ！」

顔馴染みの鬼たちは、縁と親しげに会話をしている。尚のこと呆気に取られる若鬼の傍ら、縁はハッとして、彼に向き直った。

「あっ、し、失礼いたしました、お客様！ こちらがお風呂になります！」

「あ、ああ……」

「それでは、私はこれで。ごゆっくりお過ごしくださいませ」

縁は微笑み、一介の仲居らしく丁寧に会釈した。

背を向けて足早に去る彼女。その小柄な後ろ姿を見送った若鬼は、やがて他の鬼た

ちへ視線を移す。

「……あの者は、異種族であろう。なぜあのような者が、羅刹の営む旅籠屋で働いている？ 織月の里の鬼族は異種族を嫌うと思っていたが」

「ああ、あんた、他所の者かい。なあに、あの娘は特別さ。何せ、羅刹の若君が見初めた娘だからな。いずれ本当に羅刹の花嫁になるだろうよ」

「何？ では、あの者がこの宿の若女将となるのか？ あのように弱そうな小娘が？」

「ははっ、チンケで頼りねえのは、確かにそうさな」

湯上がりの鬼たちは笑い、頷き合う。彼らは地元の鬼たちであり、縁が燕屋に拾われた時から、その成長を遠巻きに見てきた者たちであった。

無論、彼らも、最初から縁に対して好意的だったわけではない。

「俺らだって、最初は異種族の娘が里に居着くなんざ目障りだと思っていたさ。だが、幾年も経つうちにすっかり見慣れちゃったよ。なあ？」

「そうさな。近頃は、ああやって女将の手伝いをしたり、里の鬼たちに愛想を振り撒いたり、随分と逞しくなったもんだ」

「肩身が狭えだろうによくやってら。チビのくせに一生懸命やってんのを見ると、ついつい肩入れしたくなっちゃうのよ」

「俺ア、羅刹の若君があ娘に惚れ込んだのも理解できるぜ。まあ、古い世代の老翁

たちがどう思うかは分からねえが」

鬼たちは口々に意見を言う。皆、異種族である縁を煙たがる様子はない。それどころか、里の一員として認めているような空気すら醸し出している。

他所者である若鬼は、いまだ腑に落ちぬ面持ちで沈黙していた。

やがて、「織月の鬼が異種族を認めるとは、時代が変わったのだな……」などと呟きながら、風呂場の暖簾をくぐるのだった。

しかし、その頃。

縁は、さっそく鬼と睨み合っていた。

「このクソチビ狐！ あんた、どこで油を売ったのよ！ 愚図！ ウスノロ！」
高圧的な物言いでの罵声を浴びせるのは、縁と同じく仲居の仕事をする鬼の娘・蝶羽である。

好意的に接してくれる鬼もいれば、こうして顔を合わせるたびに悪態をついてくる鬼もある。見下ろす蝶羽の表情は不服げだ。だが、小柄な縁とて言われっぱなしなわけではない。眉根に力を入れ、腕を組みながら、「お客様をお風呂場まで案内していただきます」と怯むことなく言い返した。

「そもそも、今日のお客様のお出迎えは蝶羽様のお役目でしょう。なぜ持ち場を離れ

ていたんですか」

「急に雨が降ってきたから、外に干してる布団を大急ぎで取り込んだのよっ！
どっかの鈍足なチビが客と喋ってチンタラしてる間にね！」

「むっ、私がサボってたみたいと言わないでくださいよ！ 私だってお仕事してたんですからね！」

「どうだか！ どうせまた、箆^{なんす}の奥に隠した黒砂糖でもこっそり齧^{かじ}ってたんでしょ！」

「あ！ ちょっと！ それ大きい声で言わないでっば！ 女将様に聞かれたら——」

「——縁！ 蝶羽！」

びくうっ！

徐々に激しさの増す言い合いの最中、鋭い声が鼓膜を叩いた。途端に縁と蝶羽は戦慄^{りつ}し、息の合った連携で互いにびとりと身を寄せ合う。額に汗を浮かべ、ぎこちない笑みを口元に貼り付けたふたりは、手を取り合ったまま同時に振り向いた。

「は、はい……」

「あんたたち、さっきからうるさいわよ！ また喧嘩してるんじゃないでしょうね！」

板張りの床を軋^{きし}ませ、彼女たちの元へやってきたのは、燕屋の女将・玖蘭だ。ひとたび発火すれば修羅と成り果てる女将の怒号を恐れるふたりは、張りぼての演技で仲

のよさを取り繕う。

「け、け、喧嘩なんて、とんでもございません！ 私と蝶羽様は、この通り仲良くしておりました！」

「そ、そうそう！ 女将様の聞き間違いではございませんか!? ねえ、縁様！」

「そうです！ 私はただ、蝶羽様が勝手に持ち場を離れていたことについておたずねしただけ——」

「馬鹿！ 余計なことは言わなくていいのよ！」

縁の発言を小声で咎^{とが}めた蝶羽は、女将から見えない位置で狐の尻尾を強く握る。

「ふぎっ！」と素^すつ頓狂^{とんきやう}な声を上げた縁は目尻を吊り上げ、仕返しとばかりに蝶羽の爪先を踏んづけた。「んぎっ！」と蝶羽も表情を歪め、こめかみに筋を浮かべて縁を睨む。

水面下での密かな攻防が繰り広げられる中、玖蘭はやれやれと肩をすくめた。

「落ち着きな、ふたりとも。それより、お客様の荷運びを手伝ってくれる？」

「へ……荷運びですか？」

「ええ、量が多いのよ。頼めるかしら」

玖蘭は顎を引き、ふたりを手招いた。縁と蝶羽は互いに顔を見合わせたが、すぐに表情を歪めて「ふん！」と顔を背けてしまう。性懲^{しやうご}りもなくいがみ合うふたりが女将

についていくと、そこには大荷物が積み上がっていた。

「わあ、確かに、これは多いですね……」

小柄な縁が見上げるほどの積荷である。どれも良質な風呂敷や、木の箱に包まれていて、見るからに高価こうかそうな荷が多かった。

特に目を引いたのは、漆塗りうるしの黒い箱。花弁を模した金彩きんさい蒔絵まきえが美しく、朱色の組紐で蓋が閉じられていて、大層豪華なものが収められているのだろうと縁は感嘆の息を漏らした。

「すごい、豪華な箱……」

思わず呟いた時、背後から「おほほほ」と甲高い笑い声が聞こえてきた。

ぎくりとして振り向くと、ふくよかな鬼の女性客が慎ましく歩み寄ってくる。どうやら、この荷の持ち主らしい。

「おほほ。そのお箱、気になりますの？」

「え？ あ、はい！ えっと、素敵だなど思いました」

「あーら、あなた狐のくせに見る目があるわねえ！ そうなのよ、素敵でしょう？ 綿津見屋で購入いたしましたのよ」

「綿津見屋？」

「ええ。小間物こまものを扱うお店ですの。都で出合ったんだけど、とっても素敵な品を売

る店だったわあ」

恍惚こうこうとした笑みを浮かべ、裕福そうな女性目は目を細める。箱に向けられた視線にも熱がこもっている。よほど貴重な品が中に入っているのだろう。

「それは高価そうですね……」

「ええ。ですから、どうか丁寧に扱ってくださいませね。大事な中身に、傷がついたら大変ですもの」

「も、もちろんです」

「決して、落したり、開けたりなさいませんよう」

声を低め、どこか庄のある物言い、女性客は言いつけた。縁が緊張感をあらわに顔くと、彼女は微笑みを浮かべて背を向ける。

「それでは、わたくしは部屋で待つことにいたしますわ。荷運び、よろしくお願いいたしますね」

「え、ええ。ゆっくりなさってください」

「くれぐれも、箱は勝手に開けないように。おほほ」

念入りに言い聞かせた女性客は、縁たちを残し、客間へ去っていった。

深く頭を下げた女将の隣で、縁と蝶羽も頭を下げる。だが、姿勢を戻した時、蝶羽が不服を漏らした。

「ふん、何よ、あの言い方。あたしたちが勝手にお客様の私物を物色するとも言いたいのかしら。どうせ箱の中身だって大したものなんか入ってないくせに」

「こら、蝶羽。お客様に聞こえるでしょう。口を慎みな」

玖蘭に窘められ、蝶羽は唇を尖らせろ。「それより、あんたたちだけで、この荷物運べる？」と問う玖蘭に、蝶羽は胸を張った。

「これぐらい、余裕でございますわ、女将様。あたしは強い鬼ですもの。どっかの貧相なおチビは、どうだか知りませんけれど」

「むっ……」

蝶羽に煽られ、今度は縁が口元を歪ませる。ふたりの仲の悪さを熟知している玖蘭は「心配だわ……」と懸念しつつも、彼女たちに荷運びを任せることにした。

「じゃあ、ここは頼むわね？ あたしは他の仕事があるから」

「お任せください！」

ふたりは声を揃える。玖蘭はその場を離れようとしたが、最後に何かを思い出し、
「あ、そうだ、縁」と振り返って呼びかけた。

「今夜、仕事が終わったら、あたしのところに来なさい」

「えっ!? な、何ですか？」

「話があるのよ。分かったわね」

玖蘭は短く言いつけた。去っていく背中を見送りながら、縁はぎこちなく顔を強張らせる。

「な、何だろ……お説教かな……」

「黒砂糖の隠し場所がバレたんじゃない？」

「ええ！ そんなあ！ どうしよう！」

「ま、そんなことはどうでもいいから、さっさと荷運びを済ませましょ。あんたは見ただけでいいわよ、チビ。どうせ重くて運べないでしょ」

顔面蒼白の縁を差し置いて、蝶羽はさっそく荷運びに取りかかった。一言多い蝶羽に苛立った縁は、ムキになって腕をまくる。

「あまり見くびらないでください！ 私だって鍛えているんですからね！」

そして縁は、先ほど丁寧に運ぶよう忠告された箱ごと、目の前に積み上がった荷を抱えてしまった。

「うぐっ……。ほ、ほら！ ちゃんと抱えられるでしょ！ 重くなんてないです！」

「ちょ……あ、あんた、無理すんじゃないわよ。腕がプルプルしてるじゃないの」

「平気ですってば！ 早く運んでしまえよう！」

「いやいや、危ないって。意地張ってないで、一度降ろした方が——」

嫌な予感を感じた蝶羽が忠告するが、時すでに遅し。

かくんつ。

縁は足をもつれさせ、荷物ごと前方に傾く。

「ああっ!!」

蝶羽は目を剥いて叫んだ。縁の体の均衡は完全に崩れていた。例の箱まで宙に投げ出され、ふたりは血の気を失う。

「箱があっ!!」

絶望を孕んだ叫びが同時に飛び出した——刹那。縁の危機を察した何者かが、疾風のごとき速度で廊下に滑り込んできた。

顔面が床に叩きつけられる寸前で、強い力に支えられる縁。温かな体温が密着し、安堵の息も耳元でこぼれる。

恐る恐る顔をもたげると、美しい黄褐色の瞳と、視線が交わった。

「まったく……油断も隙もないな、お前は」

「琥珀!」

転倒しかけた縁を片手で抱きとめ、落下しかけた荷物と一緒に掴まえてくれたのは、許婚である琥珀だった。彼はいささか呆れているような表情をしていたが、縁を見つめる視線には慈愛の感情が溶けている。

一方、縁は箱の安否が気になるようで、落ち着きなく周囲を見渡した。

「こ、琥珀、ありがとう! でも、あの、箱は!? 箱の中身は無事!」

「箱? ああ、お前が持っていたこれか? 案ずるな、落としてはいいない」

琥珀は涼しげな表情で答え、縁が運ぼうとした箱を掲げた。どうやら無事のように、縁は脱力する。

「は、はああ、よかったあ。無事だったあ」

「よかった、じゃないわ! このドジ!」

「あいたっ!」

その時、蝶羽がすかさず迫り、縁の頭を引っぱらいた。

頭部をさす縁の目の前で、蝶羽は怒気をあらわにする。

「危ないって言ったそばからすっ転びやがって! どこまで鈍臭いのよっ!」

「す、すみません、蝶羽様……」

「まったく、箱の中身が無事でよかったわ……。お手を煩わせて申し訳ありません、若様あ。縁様のドジを救っていたんで、ありがとうございますう」

琥珀と目を合わせた蝶羽は猫撫で声を発し、彼から箱を回収した。身分の高い羅刹の前だと普段の高飛車を封じ、低い姿勢に転じるのが彼女の流儀である。そんな強かな蝶羽の傍ら、縁は落胆した様子で耳と尻尾を垂れ下げていた。

「大丈夫か、縁。どこか痛めたか?」

「へ」

こつん。琥珀は、腕の中にいる縁の額に、自身の額を押し当てる。片腕で支えるだけに留めていた縁のことも、いつしか姫抱きになっている。露骨に顔を顰めた蝶羽の視線もお構いなしである。

互いの額を合わせるこの行為は、幼い頃から続く安否確認のひとつだ。至近距離から見つめる双眸は縁だけを捉えていた。

おそらく心配してくれたのだろうと、縁は笑う。

「あ、ううん。大丈夫。琥珀のおかげで、どこも怪我してないよ」

「……そうか」

怪我がないことを確認し、琥珀は短い返事と共に立ち上がった。しかし、その腕は、いまだに縁を抱えたままだ。

なぜか姫抱きの状態が続いていることに、縁は困惑した。

「んん……？」

首をかしげ、琥珀を見上げる。

「ええと、琥珀？」

「何だ」

「あの……も、もう、降ろしても大丈夫だよ？ 私、自分で歩けるから」

「ああ、そうか」

「うん」

「……」

「……琥珀？」

琥珀は縁を姫抱きにしたまま、やはり動かない。縁は訝しげに目をしばたいた。一方で、琥珀は何か言いたげに口元をまごつかせている。

しばらく妙な間が開き、沈黙が流れた。縁は怪訝な表情で琥珀の顔を見つめている。だが、ほどなくして、ついに琥珀が目を逸らした。

「……いや、何でもない」

琥珀は眩き、ようやく縁を床に降ろす。一体何だったのだろうかと思ふと縁は不思議に思うが、追及する前に第三者の聲が耳に届いた。

「おーい、仲居さん！ 廁の場所まで案内してほしいんだが！」

「あつ、はい！ ただいま！」

客の呼び声に反応し、縁はパタパタと駆けていく。容易く離れる背中を見つめ、琥珀は深く嘆息した。

屋根を打つ雨の勢いは徐々に弱まり、小雨となつて、雨音も和らぐ。樽縁の軒を伝う雨垂れの粒は身を寄せ合い、混ざり合つて、共に地面に落ちていく。

琥珀は目を伏せ、先ほどまで縁に触れていた手を見つめた。温もりの消えたその手を軽く握った時、ひとつの懸念が脳裏をよぎった。

琥珀は眉をひそめる。そして、近くにいる蝶羽を見遣り、遠慮がちに口を開いた。

「なあ、蝶羽……」

琥珀が呼びかけると、蝶羽はすぐさま反応する。

「はいっ！ 何でしょう、若様っ！」

珍しく琥珀から声をかけられた彼女は、機会が来たとばかりにとびきりの笑顔で答えた。先ほどまでは恋仲同士の睦み合いを見せつけられて食傷していた蝶羽だが、琥珀の心がいかに縁一筋であろうとも、あわよくば花嫁の座を横取りしてやろうという野心は相変わらずだ。肉食獣のごとく目を光らせ、虎視眈々と玉の輿を狙う。

そんな彼女の企みなど露知らず、琥珀は言いにくそうに口を開いた。

「ひとつ、聞いてもいいか」

「ええ、もちろんですよー！ あたしのことが知りたいだなんて嬉しいっ！ 何でもお聞きくださいね、おほほ！」

「いや、縁のことなんだが……」

スツッ。

それまで爛々と瞳を輝かせていた蝶羽だが、琥珀の口から縁の名が出た途端、愛想

の仮面は剥がれ落ちた。表情からは笑顔が消え、瞳に影が差し、辟易した舌打ちすら漏れる。

「チッ、何よ、結局あのチビのことか……期待して損したわ……」

「おい、蝶羽？ 何をブツブツ言ってる？」

「あー、いえいえ何でもございせんよお、おほほ。で、縁様がどうかありませんかあ？」

露骨に態度を変えた蝶羽は、さっさと済ませて仕事に戻ろうと、据わった目で適当に答えた。

琥珀はところどころ言い淀み、躊躇いがちに吐露する。

「その……縁が……」

「はいはい」

「最近、俺に対して、恥じらう様子がなくなつたように、感じているのだが……」
気のせいだろうか——と声をひそめ、神妙な面持ちで意見を乞う琥珀。

蝶羽は、一瞬ぽかんとした。その後、自身の顎に手を当て、直近の縁の様子を想起してみた。言われてみると確かに、縁の態度は以前より落ち着いた気がする。

「あー、確かに……。少し前まで露骨すぎるほど若様のこと意識してたのに、最近はずっとそんなふうに見えませんか」

「や、やはりそうか!？」

「ええ。真っ赤になることも、物陰に隠れてウジウジすることもなくなりましたね」

「そ、そうなんだ。縁のあの態度は、一体どういう心情なんだ？ 女子であるお前ならば分かるかと思っただが——」

「え？ 単純に若様に飽きたんじゃないですか？」

バツサリ。蝶羽は臆すことなく言い切った。遠くで雷鳴が轟くと同時に、琥珀の表情にも亀裂が入る。

そもそも蝶羽は、琥珀と縁の関係を良好に取り持つてやるつもりなど毛頭ない。むしろ捌れさせてやろうとすら考えており、『適当なことを吹き込んでおけば若様もあのチビに失望するわよね』などと意地の悪い企みすら胸に秘めている。齒に衣着せぬ物言いで堂々と述べた蝶羽は、硬直する琥珀の心境などお構いなしに続けた。

「ほらあ、おふたりって、幼い頃から同じ屋根の下で過ごされてますでしょ？ もはやお互いのことを知りすぎてて、慣れちゃってるわけです。熟年夫婦的な」

「な、何……だと……?」

「そもそも若様は、口下手で、奥手で、女心も分かっておられませんし。いくら好きでも、味のない餅ばかり毎日食べていたら飽きますでしょ？ それと似たようなものですよ。今の縁様は、若様と過ごす日々に刺激が足りなくなってるんです。要するに

情性で付き合ってるんですよ」

適当に言葉を並べ立て、まあ知らんけど——と胸の内だけで舌を出す蝶羽。だが、口からでまかせを並べる蝶羽が思う以上に、琥珀の心は脆い部分をグサグサと串刺しにされていた。

「味のない餅……情性……」

完全に真に受け、放心している。

彼が大真面目に懸念していたのは、近頃、すっかり落ち着いてしまった縁の態度についてであった。

少し前までは明らかに琥珀を意識し、目が合うだけで赤面し、挙動不審に陥っていた縁。だが、旅籠屋での花嫁修業が長くなるにつれて感性が大人びたのか、うぶでいじらしい反応が極端に少なくなってきたのだった。

琥珀が隣にいても。至近距離で目を合わせても。先ほどのようにさりげなく密着しても——恥じらう気配がまるでない。笑顔で受け流されることさえある。

この現状に、琥珀は危機感を覚えていた。元々兄妹のように育ってきたせいで気を許しすぎている節はあったが、それにしても縁には、自分たちが年頃の男女であるという意識が足りない。もはや恋仲だという感覚が薄まり始めているのではないかと琥珀は危ぶんでおり、事実、同じ寝間で床につくようになってしばらく経つが、緊張し

て寝付けずにいたあの頃の縁はどこへやら、今では自分の尻尾を抱いてさっさと熟睡してしまふ始末である。

（ふ、ふざけるなよ、アイツ……！ 何が惰性だ！ 俺の方は、いまだに一晚中落ち着かんというのに……！）

半ば八つ当たりに近い歯がゆさを抱きつつも、琥珀は「いかん、冷静になれ」と自身を律してかぶりを振った。だが、蝶羽の告げた「惰性」の言葉は聞き捨てならず、ぐるぐると琥珀の思考を蝕む。

頭を抱え、険しい表情で眉間を押さえていると、蝶羽は興味なさげにあくびをしながら背を向けた。

「まあ、ほどほどに頑張ってくださいませ、若様。あたしは荷運びがありますので、これで」

「ま、待て、蝶羽！ 女心とはどうすれば理解できる!? 惰性で付き合わせないためにはどうすればいいんだ!？」

「縁様のことですし、食いもんでも与えときやどうにかなるでしょ」

「お前、適当に言っているだろう!」

「おほほ」

追いすがる琥珀を笑って躲^{かわ}した蝶羽は、気まぐれな蝶のごとくひらりと身をひるが

えし、「ご機嫌よう」と手を振って去っていった。疲弊した琥珀は、「相談相手を間違えた……」とぼやいて、自身も廊下を後にする。

その時、琥珀はふと、先ほど縁がつまづいた際に落下させかけた、漆塗りの豪華な箱のことを思い返した。

「そういえば、先ほど、縁と蝶羽が気にかけていた箱……中身が入っていないように感じたが……」

手に取った際の感触を思い返し、琥珀は訝る。

なぜ、あのふたりは、空箱の中身をなんて気にかけていたのだろう——？

「……どうでもいいか」

琥珀は思考を散らし、離れに戻っていった。

第二話 福を宿す手箱

忙しい旅籠屋の仕事が一段落し、陽が暮れ落ちて夜が来る。板張りの廊下を進んだ縁は、緊張した面持ちで玖蘭の元を訪れた。

「失礼いたします……」

か細い声で襖を開ける。一体何の件で叱られるのだろうと身構えていた縁だが、「あら、来たわね」と迎えた玖蘭の表情は柔らかく、畳の上には様々な小間物が並べられていた。

櫛、簪、化粧道具——縁は数回まばたきをして、玖蘭のそばに正座した。

「あの、女将様、これは？」

「嫁入り道具よ。そろそろあげようと思ってたの」

「嫁入り道具!？」

縁はピンと耳を立てた。玖蘭が整頓していた小間物は、縁に譲り渡す嫁入り道具だったのである。

「我が子の嫁入りが決まったら、母が子に嫁入り道具を譲るのが習わしでしょ？」

玖蘭はそう言い、縁の前で化粧箱を開ける。白粉、紅、香油……あらゆる化粧品が詰め込まれていた。いずれも豪華な装飾で彩られているそれらに、縁は憧憬の眼差しを向ける。

「わあ、綺麗……」

「そろそろ、お化粧も練習しないとね。祝言前にはご挨拶もあるし」

「ご挨拶？ 誰にご挨拶するのですか？」

「そりゃあ、酒吞童子様よ」

「しゅてんどうじ様……？」

「え、あんた、酒吞童子様を知らないの？」

ピンと来ていない様子の縁を見て、玖蘭は意外だとはかりに目を丸める。次いで、「まあ、あのお方はずっと山奥で隠居なさってるから、会う機会なんてなかったものね」とこぼし、頬に手を当てながら嘆息した。

「酒吞童子様は、豪鬼丸のお父上よ。あんたにとってはお爺様」

「え！ 私、お爺様がいたのですか!？」

「ええ。酒吞童子、っていうのは、鬼族の頭領を引退し、隠居した鬼に与えられる称号なの。簡単に言うと、元頭領のこと」

「元頭領！ それでは、とっても偉いお方なんですわね!」

縁は前のめりになり、そわそわと尻尾を揺らめかせる。淡藤色の瞳は好奇心で輝いていた。

「私にお爺様がいたなんて、初めて知りました！ どんなお方なんだろう。豪鬼丸様のお父上なら、きつとすぐくお強いんですね？ 岩みたいな大男で、力持ちで……」

「そんな化け物みたいなお方じゃないわよ……。どちらかというと、線が細くて小柄だわ。自由奔放で、楽観的で、豪鬼丸よりもウチの長男とよく似てるわね」

「黎雪の兄様と?」

玫瑰の説明に耳を傾けながら、縁は羅刹の長子である黎雪の姿を思い描く。縁の脳裏をよぎった兄貴分は、毎度懲りず賭博に敗れ、ふんどし一枚となってもまだ賭け事に喰らいつくような性分である。

持ち前の放蕩癖で、うつけと称されがちな兄を想起しつつ、縁は口元をまごつかせた。

「……まさかと思いますが、お爺様も博打がお好きですか？」

「ふんどし姿は瓜二つだと聞いているわ」

「ああ……」

据わった目で遠くを見る玫瑰。縁はぎこちなく頷き、頬を引きつらせた。

一方、その頃。たった今話題にのぼったばかりのうつけの長男は、上機嫌で鼻歌を口ずさみ、旅籠屋の床を軋ませていた。

「ふんふふーん、ふん……」

羅刹一家の長男坊・黎雪。ほろ酔いで帰宅したらしい彼は、派手な足音を立て、ズカズカと廊下を歩いてくる。普段は玫瑰の怒号を恐れ、忍び足で帰ってくるというのに、これほど堂々と帰宅するのは珍しいことだ。

「おーう、帰ったぜえ！ 退いた退いたア！ お兄様のお通りだーい！」

黎雪は澆刺と声を張った。居間では琥珀と、父である豪鬼丸が夕餉を食している最中だったが、襖を開け放った黎雪の姿を目にしたふたりは箸を止めて硬直した。

「は……!?」

琥珀と豪鬼丸は、信じられないといった表情で瞠目する。それもそのはず。何と、うつけの長男として知られている放蕩者の黎雪が、普段の粗雑な着流し姿からは考えられないほど立派な着物姿で現れたからだ。

彼の身を包んでいる絢爛な着物の生地には金駒刺繍が施され、手元や首元の至る所に、豪華な装飾品まで身に付けている。かつてないほど装いの整ったうつけ者の登場に、琥珀と豪鬼丸は困惑をあらわに顔を見合わせた。

「お、おい。こいつア、一体どういうこった……？ 俺は今夢を見てんのか……？」

「こ、このような装い、兄上の財力でできるはずがありません。おそらく狸が化けた偽者でしょう、斬り伏せるべきかと……」

「おおい、馬鹿言ってんじゃねえ！ 本物だったの！ 博打で大勝したんだよ！」

「博打で大勝!?」

「あの黎雪が!?」

さらなる衝撃発言が飛び出し、豪鬼丸と琥珀は思わず身を乗り出す。「おめえ、ついにイカサマに手を出したのか!?」とまで疑う父に、黎雪は「んなわけねーだろ」と

呆れた。

「ったくよお、どうしてどいつもこいつも同じこと言うかね。賭場の環たまきにも延々と詰められたんだぜ? 『どんな手を使いやがった』ってさ!」

「当たり前でしょう、兄上が小細工なしに賭博で勝つなんてあり得ません!」

「酷くない? 俺だってたまには勝つんだけど? まあ、ここまでの大勝は初めてだよ」

真顔で言い放つ琥珀に反論しつつ、黎雪は頬を緩めて「いやあ、爽快だったぜ?」と勝利の余韻に浸る。

「壺が振られるたびに出目が揃ってさア、勝った金をさらに上乘せして、気がついたら大儲けよ。賽さいの目が俺を呼んでんじゃねえかってぐらい読みを外さなかったんだ」
「そんな馬鹿な……」

「環も目ん玉かつ開いて俺のこと見てやがったが、イカサマなんざしてねえもんだから止めようがねえってわけ。くつくく、アイツのあんな面ア、初めて見たぜ」

黎雪は高揚した様子で喉を鳴らし、成金臭が漂う胡乱うろんな風貌のままあぐらをかく。見慣れぬ兄の出で立ちにぎこちなく頬を引きつらせる琥珀の隣で、黎雪は構わず続けた。

「親父も明日、一緒に行かねえか? 俺と行けば大勝できてると思うぜ?」

「おいおい、何でそんな自信満々なんだ、おめえは……。本当にイカサマしてねえんだろ?」

「誓ってイカサマはしてねえ! だが、福の神のご利益があったのは確かかもな!」
得意げにのたまう黎雪に対し、豪鬼丸は「何だそりゃ」と訝しむ。すると、黎雪は懷から黒光りする洒落しやれた小箱を取り出した。それは手のひらに収まるほどの大きさで、全体に漆が塗られ、金の蒔絵が美しい小箱だ。蓋は硬く閉ざされており、組紐が結ばれている。

「これは……」

琥珀は小箱を凝視した。豪華な装飾と朱色の紐には見覚えがあった。豪鬼丸が繁々しげしげと見入る傍ら、黎雪は胸を張り、不思議な小箱を見せつける。

「ふふん、珍しい逸品だろ? 都で密かに出回っている工芸品らしいぜ。福手箱ふくて、つつつて、運気を引き寄せる開運の品なんだとよ」

「開運の品だあ? これが?」

片眉を吊り上げ、呆れ顔の豪鬼丸。「こんなもん、どこで手に入れた」とため息交じりに問う父に、黎雪は口角を上げ、揚々と語り始めた。

要約すると、彼の話はこうだ。

数日前、黎雪はいつものように無茶な賭博に賭け金を費やし、有り金すべてを見事に溶かしてしまった。銭が底をついたことでしばらくの間だけ賭場に泊めてくれと環に泣きついたが、罵倒されて唾を吐きかけられた挙げ句、ふんどし姿のまま外へ蹴り出されたという。

かくして宿なしの無一文となった黎雪は、ふんどし一丁で地面に転がっていた。その際、見知らぬ老婆が、声をかけてきたらしい。

「……老婆？」

そこまで聞いて、琥珀は眉をひそめた。黎雪は「おうよ」と頷く。

「何でもその婆さん、開運招福の小間物屋を営んでるらしくてな。持ち主に福を運ぶ手箱だつて、こいつを俺にくれたんだよ」

「はあ？ よくそんなものを受け取りましたね、兄上。怪しすぎるでしょう」

「いやー、立派な蒔絵が見えたんで、売ったら金になるかと思って……だがな、こいつを受け取ったのが僥倖だったわけよ！ 何とびつくり、たまたま道端に小銭が落ちていやがつてな？ そいつを拾って最後の悪あがきで賭場に戻ったら、これまたびつくり、そいつが当たって前代未聞の大勝利つてわけ！ たった数刻で大儲けだ！」

黎雪は興奮気味に事の詳細を語る。「この小箱のご利益で、あれよあれよと福が舞

い込んできたつうわけよ！」と締め括られた内容はあまりに出来すぎた話である。

琥珀は半信半疑で訝しみ、豪鬼丸は肩をすくめた。

「何の対価もなしに福が舞い込むなんて、そいつは虫がよすぎるぜ。一生分の運をその箱に喰われちまつたんじゃないかねえのか？ それなりの返しが来ると思うが」

呟く父に、黎雪は腕を組み、「おいおい親父、いつまで古臭え価値観に囚われてんだ？」とせせら笑う。

「こいつはな、金回りをよくしてくれるだけじゃねえんだ。これを手にしてから俺は、都を歩くたび、どの店の主からも笑顔でもてなされるし、可愛い女の子にも声をかけられちまうしで、ありとあらゆる福が舞い込んできてんだよ。これも日頃の俺の行いがいいってこつた。きっと御仏に与えられた慈悲に違いねえ」

「……それは単に、兄上が成金さながらの装いをしているせいで、おこぼれにありつこうという蠅が寄ってきているだけでは？」

「んっだとコラ、琥珀！」

「まあまあ、熱くなるな黎雪。おめえぐらいの年頃のあやかしにや、そういう開運の謳い文句が刺さっちゃうのも分からず。しかしな、上手い話には必ず裏があるもんだ。そこは重々覚えとけよ」

調子づく息子を冷静に窘める豪鬼丸だが、肝心の黎雪は「はいはい、分かっている

てえ」と表面的な空返事を寄越すばかり。それどころか父の説教を避けるべく軽妙に話の軸を折り、「それより、お前の方はどうなんだよ、琥珀」と唐突に標的を切り替えた。

「は、はい？ 何がですか？」

「縁とは仲良くやってんのか？ 曲がりなりにも恋仲なんだしよ、少しぐらい色っぽい空気が生まれる頃だろ？ ん？」

ぎり。かなり痛いところを突かれ、琥珀はあからさまに狼狽えた。黎雪の視線は楽しげである。兄の性分を痛いほど熟知している琥珀は、下手なことを言えば面倒な絡みを強いられるということを察していた。無論、『縁があまり恥じらつてくれなくなった』などと白状できるはずもなく、焦燥を気取られまいと咳払いする。

「……俺は、兄上と違って嫁入り前の娘に手を出すような真似はいたしません。進展など牛歩でよいのです」

「はあ？ 何言ってるんだよ。嫁入り前と言っても、自分の許婚だろ？ まさか、寝間が一緒になって長いってのに、まだ何もしてねえのか」

「お、俺の都合を押し付けて、縁を怖がらせたり泣かせたりはしなと言っているのです！」

「けっ、格好つけちまってよ。そう言いながら、お前に度胸がねえだけなんじゃね

えのかあ？」

不躰に踏み込んでくる黎雪の発言に、琥珀の眉は苛立ちを孕んでぴくりと動いた。

「琥珀って案外ヘタレだからな」などとさらに煽る兄に対し、じわじわと怒りが膨らんでいく。静かに怒気を放つ琥珀を一瞥した豪鬼丸は、一触即発な息子たちを危ぶんで口を挟んだ。

「お、おい、黎雪。もうそれぐらいにしとけ」

「でもよ、親父だっと思うとこあんだろ？ あんまり手エ出さずにゆっくり距離詰めようとしても、女つてのは『意気地なし！』とか言ってるく機嫌損ねちまうじゃねえか。特に琥珀は女の扱いが下手そうだし」

遠慮なく語り、しれっと琥珀を侮辱する黎雪。豪鬼丸が「いやあ……」と頬を引きつらせる一方、弟から放たれる殺気にまったく気が付いていない黎雪は、訳知り顔でさらに続ける。

「いつまでもチンタラしてつと、縁の方が他の男に目移りしちまうぞお？ 女つてのはなあ、どんなに強がってても、意中の男に女扱いしてもらえなきゃ拗ねちまうもんなんだよ。そんで気がつきゃ、別の男と懇ろよ」

「……兄上、そろそろお黙りください……」

「縁も男を知らねえからな。鬼の里だから誰も異種族のアイツに言い寄っちゃこね

えが、里から出てどっかの二枚目に口説かれちゃったら、案外コロッと惚れ込んだり——」

「黙れと言っているだろうが!! 戯言ばかり吐かすその口縫い付けてやるるか!!」

無神経な言葉をつらつら並べていた黎雪に、とうとう琥珀の堪忍袋の緒が切れた。琥珀はこめかみに筋を浮き立たせ、「たかが一度賭け事に勝った程度で気が大きくなるのも大概にしてくださいよ、兄上!」と楯突く。黎雪もたちまち尻を吊り上げ、「んっだこの野郎!!」と弟に牙を剥いた。

「こちとらお前のためを思って忠告してやってんだろうが! どうせまだ手繋いだぐらいで照れ笑いするようなガキみてえなママゴト恋愛してんだろ! チンタラしてる間にどっかの男に横恋慕されても知らねえぞクソガキ!」

「節操なく遊び回っている兄上の感性がずれているつつてんですよ! 縁がそのような不貞を働くはずがないでしょう! あまり戯けたことばかりほざいているとぶんどりますよこの月夜烏が!」

「てんめえ、それが兄に対する態度かア!」

「あーもー、喧嘩すんなって、お前ら!」

徐々に兄弟喧嘩が白熱し始め、放っておけば抜刀すらしかねないふたりの首根っこを豪鬼丸が掴んで止める。そして、黎雪の頭をゴチンと小突いた。

「いでっ」

「ったく、今のはおめえが悪イぞ、黎雪。琥珀には琥珀のやり方があるんだ。黙って見守ってやらねエカ」

「けどよ、親父!」

「大体よお、黎雪こそ身を固める頃合いなんじゃねえのか? 我が家の跡継ぎはお前なんだし、そろそろ見合いでも……」

「はあっ!? 冗談じゃねえよ! 見合いなんざ俺は御免だ! 家庭に縛られて生きるような柄じゃねえ! 結婚なんてするもんかよ!」

見合いの提案を黎雪は全力で拒絶し、「俺はまだ自由に遊びてえの!」などと主張する。豪鬼丸は眉間を押さえてやれやれと嘆息した。

「ったく……いいから、とにかく頭を冷やしてこい。あんまり調子づいてつと、その箱の中にいる福の神とやらに見放されちゃうぞ」

小箱を顎でしゃくり、豪鬼丸が言い聞かせる。黎雪は不服げな表情ながらも悪態を呑み込み、ふたりに背を向けた。

「……ふん、分かったよ」

大人しく身を引き、小箱を大事に懷へししまう。まだ睨んでいる琥珀を一度だけ振り返った黎雪は、べえっと大人げなく舌を出し、不遜さを隠そうともしない大股歩きで

ズカズカと居間を出ていった。

横柄なその態度に琥珀は尚のこと怒気を放つ。しかし、「お前も落ち着け、琥珀」と父に諭されて黙り込んだ。それでもやはり納得いかなかったのか、すぐに口を開く。「父上、もつと強く兄上を叱ってください！ 今の態度を見たでしょう、兄上は反省などしておりません！ 今のは思いっきりゲンコツを叩き込むべきところでした！」

「まあまあ、言いたいことは分かるがな。誰が何言ったって、アイツは聞く耳など持たねえだろうよ。そういう年頃だ」

「またそう言つて見過ごすような真似を……！ 自由にさせすぎです！ 我々鬼族の次期頭領として白羽の矢が立っているのは、羅刹の長子である兄上なんですよ！」にもかかわらず、兄上にはいづれ一族の長を務める者としての自覚が足りなすぎます！

そろそろ行いを改めさせるべきでは!?」

「だから落ち着けつて。アイツなら、俺が殴らなくても大丈夫だよ。どうせすぐに痛い目見て、嫌でも己を省みるんだからな」

どこか遠い目をする豪鬼丸は、この先に何が起るのかを見通しているような口振りで答えた。「はあ……？」と琥珀が眉根を寄せると、「ま、よく見てろ。どうせそのうち泣きついてくるからよ」と肩をすくめる。

次いで、今度は琥珀に目を向けた。

「それはそれとして、黎雪が言つてたことも、あながち間違いないじゃなかったぞ」

「は……」

「女つてのは、大事にされすぎてあんま手エ出されねえのも、それはそれで退屈になつちまう生き物さ。ゆつくり心を通わせんのも大事だが、たまには距離を詰めて、甘ったるい言葉でもかけてやらねえとなア」

「あ、甘ったるい、言葉……?」

父の助言に、琥珀は狼狽えた。

甘ったるい言葉とは、おそらく、キザで低俗な口説き文句のようなものを指しているのだろう。綺麗だとか、もうお前しか見えないとか、云々—— 齒の浮くようなこれらの言葉を、もう少し縁に伝えろと言われている。

だが、琥珀は、そういった軽薄な口説き文句をいささか不誠実なものに感じていた。真剣みに欠けるというか、薄っぺらな男だと思われるのではないかと、懸念しているのだ。

「……俺は、縁に『生涯をかけて守る』とすでに伝えておりますし、『愛している』とも伝えております。これ以上何を言えと……」

「そんな重てえ言葉はな、ここぞという時に言えばいいのさ。普段はもつと軽い言葉でいいんだよ。『可愛い』とか、『触れたい』とかよ。それだけで女心は満たされるっ

てもんだ」

「ち、父上。そういった放蕩男の思いつくような台詞は、俺には荷が重く……」

琥珀が躊躇いがちにこぼしたその時、居間の襖が不意に開いた。食事の並んだ膳を持ち、足を踏み入れたのは話題に上っていた縁だつた。

琥珀がどきりと言葉の続きを呑み込む傍ら、上機嫌な彼女は、笑顔で白い尻尾を振りながら囲炉裏の前に座る。

「ご飯、ご飯」

「おう、縁、ご苦労さん。今日も一生懸命働いたみてえだなァ。腹減つただろ？」

「あと少しでお腹と背中がくっついて、一反木綿になってしまふところでした！」

「ははっ、そりゃ一大事だ！ そんなにクタクタになるまで働いた後ならよォ、尚のこと甘つたるいもんが恋しいよなァ？ んー？」

ニヤ、と口角を上げた豪鬼丸が、琥珀を一瞥しながら強引な橋渡しをする。雑に投げ込まれたそれに琥珀は頬を引きつらせたが、縁は「え！」と白い耳を立ち上げらせて尻尾を振った。

「甘味があるのですか!? 水飴!? お饅頭!? 大福餅!?」

「さあなァ？ 琥珀なら知ってるんじゃないか？」

「ええっ、琥珀が隠してるの!? ってことは、柿!？」

豪鬼丸の発した「甘つたるいもん」の意味をそのまま受け取り、菓子か何かだと思っているらしい大喰らいの縁は、期待に満ちた淡藤色の瞳で琥珀を見つめる。その視線はあまりに無垢だ。出会った頃からこの瞳に弱い琥珀は、距離を詰めてくる縁が普段よりも一等眩しく見えてしまい、直視できずに顔を逸らした。

「さ、先に飯を食え。夕餉の前に甘味を食うと母上に叱られるぞ」

「えー、こっそり食べればバレないよ？」

「先日塩大福の粉で口周りを汚してバレたばかりのくせに何を言ってる」

呆れ顔で言いつつ、琥珀は立ち上がって背を向けた。息子の動向を眺めている豪鬼丸の視線がひしひしと背中中に伝わってくる。琥珀はむず痒さを覚え、密かに目を泳がせながら口を開いた。

「俺は、先に湯汲みして寝間へ行く。……甘味が欲しいのなら、布団に入っただ」

気恥ずかしさに耐えきれず、最後は早口になりながら、琥珀はそそくさと襖を閉めた。縁はきょとんと目をしばたたく。

「……うーん？ いつもは『寝る前に甘味は食うな』って怒るのに、今日はいいのかな。変なの」

「こりゃあ、明日は赤飯かもしれねえなァ」

「えっ、明日ってそんなにめでたい日でしたっけ？」
「さあ、どうなるかねえ」

楽しげに呟き、お猪口ちちこに酒を注いだ豪鬼丸は、「誰かさんが連れてきた福の神の機嫌次第だろうな」と微笑んだ。

第三話 甘い夜に叫声

とぶりと夜が更け、暗い闇には行燈あんどんの仄かな火が揺らぐ。琥珀は隠し持っておいた柿の実を丁寧ていねいに剥き、陶器の皿に並べ、削った香木の欠片かけらを行燈の火に焚べた。

普段はふたつ並べて別々に使用する布団も、今夜はひとつしか敷いていない。物理的に距離を縮めてしまえばさすがの縁も恥じらって意識するはずだと、琥珀は大胆な賭けに出た。これまで使う機会などなかった伽羅きゃらの香木を焚べたのも、甘い香りでの気にさせてやろうという狙いからだった。

とは言え、相手は色気より食い気が勝る能天気な縁だ。ここまで露骨に色香を放って誘惑したとて、柿に負ける可能性は十二分にある。

(……ここまでお膳立てしたというのに、柿を食うだけ食って寝られようものなら、

いよいよ父上に顔向けできん……)

じわ、と手のひらに汗が浮かぶ。だが、元より冷静な琥珀の理性はしっかりと働いている。このまま縁を組み敷いて手籠めにしようとは、微塵も思わなかった。

触れたくないと言えば嘘になる。しかし、自身の欲よりも縁の幸せが最優先である。少しでも縁が恥じらって、甘やかな空氣に持つていけるのならばそれで御の字。琥珀との触れ合いに照れ笑いしてくれば上出来だ。本来交わるはずのなかった運命を乗り越え、共に過ごせているというだけでも半ば奇跡に近いのだから、この日々を大切にしたいと強く思う琥珀にとって、それ以上を求めるなど罪深すぎて万死に値する——とすら本気で思っていた。

だが、この重たすぎる覚悟こそが面白みに欠けるという意見も、冷静になった今ならばよく分かる。

(兄上の考えを認めるのは癪だが、縁がどこぞの馬の骨とも知れん輩に口説かれて、あまつさえ惚れ込みでもしたら……)

嫌な思考が脳裏を掠めた瞬間、脳内に描かれた縁が見知らぬ男と手を繋いで駆け落ちする悪夢を想像してしまった。琥珀はピキピキとこめかみに青筋を浮かべ、思わず枕を殴りつける。ボコォツ、と蕎麦殻入りの枕の中央がへこんだその時、夕餉と湯汲みを済ませた縁が、大きなあくびをこぼしながら寝間に入ってきた。

「ふああ、眠い……。あれ？ 何だろ、いい匂い」
「っ……………」

ビクッ。思わず肩が跳ね、琥珀は生唾を嚥下する。

スンスンと鼻を鳴らす縁は早々に香木の匂いに気がついたらしく、嗅ぎ慣れない甘い香りの出どころを探して室内を徘徊した。しかし、香木を見つけるよりも早く、皿に盛られた柿の実がその目を奪う。

「あつ！ 柿が剥いてある！ 本当に甘味用意してくれたの!? やったー！」

それまで眠たげな目をしていた縁だが、一口大に切り揃えられた柿を見つけた途端に覇気が戻った。一組しか敷かれていない布団など意にも介さず、躊躇（ためら）いなく琥珀の隣に腰を下ろして「食べてもいい!?」と問いかける。その瞳は爛々と輝いていてまばゆいが、琥珀の心境は複雑だ。

（チッ、やはり恥じらうより先に柿か……）

部屋に満ちた馥郁（ふくよく）たる香氣より、縁の気を引いたのは柿の実だった。密かに歯噛みするが、その一方で、琥珀は湯上がり縁から漂う優しい香りにも気を取られていた。今宵は柚子湯に浸かったのか、柑橘のよい香りが鼻先をくすぐる。しつとりと濡れた髪や、首元、火照ってぬくもった白い肌が、やけに視界に焼き付いてしまう。

普段の琥珀であれば、ここで迷わず煩惱を払う。だが、今の琥珀は、縁に、甘いも

のを提供しなくてはならない。

琥珀は喉を鳴らし、男になれと自身を鼓舞して、縁の腕を掴んだ。

「……俺が食わせてやる」

「へ？」

琥珀はおもむろに上体を起こし、縁の体を引き寄せた。華奢（きゃしゃ）な彼女は簡単に琥珀の方へ倒れてくる。その小柄な体躯を覆うように、琥珀は背後から密着して腕の中に包んだ。

あぐらをかいた膝の上に縁を乗せ、ぽかんとしている彼女の腹に手を置いた琥珀は、緊張を悟られぬよう平常心を装って着物の下に残る傷痕を布越しに撫でつける。「ひゃ……」とくすぐったさに身じろいだ縁の上擦った声に再び喉元を上下させた琥珀は、白い狐耳の付け根に唇を寄せた。

「……お前、普段あれだけ食うくせに、少し痩せたか？ 軽くなった気がする。働きすぎなんじゃないのか？」

「え…………？ あ、あの、琥珀……」

「ほら」

明らかに訝しむ縁だが、何かを言われる前に琥珀は空いた手で柿の実を摘んだ。熟して赤みの増している柿を目の前にチラつかせると、琥珀の腹に押し当てられて窮屈

そうにしている縁の尻尾が分かりやすく揺らめく。

「柿っ……！」

「縁、口を開ける。俺が肥えさせてやる」

「へ？ えっと、私、自分で食べられ……」

「食わんなら俺が食うぞ」

「いいえ食べます!!」

様子のおかしな琥珀に困惑する縁だったが、目の前にぶら下げていた柿を遠ざけると背筋を伸ばして彼の行動を受け入れた。

奥手な琥珀にしては大胆な距離の詰め方を試みた方だ。しかし、縁にはまだ恥じらう気配がない。どちらかと言うと戸惑いが勝っているようで、何か企んでいるのではないかと警戒しているような素振りが見て取れた。

目の前にぶら下げられた柿にもすぐにはかぶりつかず、目を凝らしたり、匂いを嗅いだりと一通り怪しんだ後、やはり食欲に負けて恐る恐る口をつける。

そして、柔く熟した実を頬張った瞬間、甘く広がる至福の味に目を輝かせた。

「ん、んんっ！ 甘くておいしいー！」

ほわ、と縁の頬が赤らんだ。上気した頬の色は、完熟して蕩けてすらいる柿の実の色とよく似ていた。

琥珀は密かに緊張を呑み込み、齧られて半分になった実に残っていた黒い種を指先で器用に取り除く。そして、もう一度、縁の口元にそれを宛てがった。すると、今度は何の躊躇いもなく口を開けた縁がその実を啄む。

「んふふ、幸せえ……」

「もうひとつ食べるか？」

「うんっ！」

縁は頷き、琥珀の指に摘まれたふたつ目の柿も笑顔で頬張った。すっかり柿にご満悦の縁は、警戒心など簡単に捨ててしまったらしい。囁めば囁むほど満ちていく甘みを咀嚼しつつ、不意に顔をもたげた。ジッと見つめ続けている琥珀と視線を交え、縁は狼狽えてごくと柿を飲み込む。

「な、何？ 食べてるところそんなにジッと見つめられると、ちよっと、恥ずかしいよ……」

眉尻を下げて恥じらう縁。だが、それは琥珀の求めていた恥じらいとは、いささか違う気がした。

（食ってるところを見られるのは恥じらうのに、俺と密着していることには何も思わんのか、こいつ）

縁の反応が思ったそれではなく、緊張感が次第に歯がゆさに変わっていく。次いで

意地のようなものまで顔を出し、何としても縁の気を自分に向けてやろうと、琥珀の行動は大胆になった。

「……相変わらず、お前の肌はぬくいな、縁」

「ふひゃ!」

腹に添えていた手を着物の隙間から滑り込ませ、軽く素肌に触れてみる。縁の腹部に残っている傷痕を直接指先でなぞれば、縁は「ひいえっ!」と色気のない声を裏返し、肌を粟立たせて身をよじった。

「ちょ、ちよつと琥珀! くすぐりたいよ! 着物の中に手なんか入れないで!」

「手の先が悴^{かじ}んできたから温めているだけだ」

「そんなに悴むほど寒くないでしょ!? 火鉢がいるような気候でもないのに!」

おかしなことがかり口走る琥珀に、縁はいよいよ違和感を覚える。じとりと目を細め、疑惑の眼差しを向けると、琥珀はわずかに動揺した。

「……何か隠してるでしょ、琥珀」

縁は疑わしげに問いかける。琥珀は目を泳がせる。その反応を見逃さなかった縁は、
「あ、やっぱり!」と尻尾の毛を逆立てた。

「何よ、今度は何を隠してるの! 言いなさい!」

「お、落ち着け、俺は別に何も隠していな……」

「嘘つき! 琥珀はいつも私に隠し事するんだから! そう何度も誤魔化せると思わないでよね!」

縁は眉根を寄せ、前のめりに琥珀に詰め寄る。

かつて、妖狐との因縁や、腹に残る傷痕の真相を琥珀から隠されていたためか、縁は彼の隠し事に対してやや敏感になっていた。

「目的を言いなさい、琥珀。夫婦間での隠し事なんて、許さないんだからね」

腕を組み、小柄な体躯で睨み上げ、母を彷彿^{ほうふつ}とさせるような物言いで圧をかける縁。着実に玖蘭の教えを引き継いで鬼嫁化し始めている彼女に目をしばたいた琥珀は、幼い頃、父が何気なくこぼした『縁には玖蘭みてえな鬼嫁になる素質がある』といった趣旨の言葉を思い出した。

琥珀は無意識に口角を上げ、怒った顔をしている縁の頬に手を添える。

「……出会ったばかりの頃は、このように愛い娘が、母上のようなわけがないと本気で思っていたんだがな」

ぽつりとまろび出た琥珀の眩き。それを耳で拾い上げた縁は目を見張る。

「……へ!? う、愛い!? 私が!」

「ああ、出会った頃からそうだぞ。もちろん今でも愛いが」

「ど、ど、どうしたの急に! そ、そうやってご機嫌取って褒めれば、誤魔化せると

立ち読みサンプル はここまで

思ってるでしょ……！」

「その場しのぎで言っているわけじゃない。俺は、ずっと、お前が誰より可愛いと思ってる」

普段はついぞ言うことのできない軽薄な口説き文句を、琥珀は真面目な顔付きで口にした。近距離にあった縁の顔はみるみる紅潮し、それまで吊り上がっていた眉も徐々に八の字に下がり、両手で口元を隠して縮こまる。

それはまさに琥珀が見たかった反応であり、恥じらいの仕草だった。ふと、琥珀の脳裏を父の言葉が掠める。

——重てえ言葉はな、ここぞという時に言えばいいのさ。

——普段はもっと軽い言葉でいいんだよ。『可愛い』とか、『触りたい』とかよ。

——それだけで女心は満たされるってもんだ。

「……可愛い」

琥珀は父の教えをなぞるように眩き、熱く火照った縁のこめかみに優しく唇を押し当てた。

「お前は可愛いよ、縁」

囁きながら頬や額に口付けを繰り返し、傷のある腹を直接なぞる。縁はますます紅潮し、揺らぐ瞳で琥珀を見上げた。月によく似た黄褐色の瞳が、熱を帯びた視線を注いでくる。もう慣れたと思っていたふたりきりのこの時間が、強烈な緊張感を運んでくる。

気が付けば、縁は布団の上に仰向けに押し倒されていた。縁を組み伏せた琥珀は彼女の顔の横に肘をつき、至近距離から視線を交えてくる。

「こ、琥珀……？」

かろうじて紡いだ名前は、頼りない声量でこぼれ落ちた。男女の色恋事情に疎い縁とて、ここまでくれば琥珀の行動の意味が理解できてしまう。明らかに戸惑い始めた縁の様子を満足げに見下ろした琥珀は、彼女の白い首筋に顔を埋めた。

「う、ひ」

「ふっ……何だその声。相変わらず色気がないな」

「う、う、うるさい！ 琥珀の馬鹿！ スケベー！」

「ああ、何でも言え」

少しばかり余裕が出てきた琥珀は、縁の悪態にも笑って答えながら啄むように柔肌を食んだ。途端に縁は息を呑んで大人しくなる。首筋に甘噛みを繰り返す琥珀の、骨張った指先が、襦袢じゆばんの上から肌をくすぐる。